

巻 頭 言

吉良竜夫先生を偲んで

関西自然保護機構会長 石 井 実

本会の設立にご尽力され、副会長、顧問、名誉会員として長くご指導いただいた大阪市立大学名誉教授吉良竜夫先生が、本年（2011年）7月19日に享年91歳で永眠された。

吉良先生は1919年に大阪でお生まれになり、旧制府立北野中学校、旧制第三高等学校と進まれ、1942年に京都帝国大学農学部を卒業された。折しも第二次世界大戦の最中であり、先生も半年繰り上げ卒業の後に兵役に就かれたが、すぐに病気のために除隊・帰郷されている。その後、先生は母校農学部の園芸学研究室で助手、助教授を務められ、1949年からは新制大阪市立大学理工学部（1959年以降は理学部）に教授として赴任、植物生理生態学講座を担当されたほか、附属植物園長も兼務された。先生は1981年9月、定年を待たずして大阪市立大学を退職、翌1982年4月に開設される滋賀県琵琶湖研究所の初代所長に就任され、12年半にわたって所長としてリーダーシップを発揮された。

先生はスケールの大きな生態学研究者で、日本およびアジア地域において森林生態系や植物個体群、植物地理学などの研究に取り組まれ、「暖かさの指数」と「寒さの指数」として知られる温室指数を考案されるなど、植物生態学分野で多くの業績を残された。また、1970～1974年にマレーシアのパソー森林保護区で行われた国際生物学事業計画（IBP）の日英馬共同調査では、研究と組織の両面で中心的な役割を果たされ、熱帯雨林に

おける有機物生産や炭素循環の実態の解明に貢献されたほか、日本生態学会や日本熱帯生態学会の設立や運営などにも尽くされた。

琵琶湖研究所時代には、1984年に大津市で開催された第1回世界湖沼環境会議の実行委員長を務められ、国際湖沼環境委員会（ILEC）の創設にご尽力されるとともに、その科学委員会の委員長に就任、世界の湖沼環境問題の調査・研究や人と湖沼の共存を探る活動にも力を注がれた。

これらの業績により、先生は1986年に英国生態学会の名誉会員に選出され、1995年には日本人初のコスモ国際賞を受賞されたほか、南方熊楠賞（1995年）や日本学士院エジンバラ公賞（1998年）など多くの賞を受けられている。

先生がとくに精力を傾けられたのは、やはり森林の研究だったと思われるが、その視点は常に広く、システム全体や人間社会との関係に及んでいた。例えば、熱帯雨林の研究では、炭素や水の大循環の観点から、先生はその地球環境の安定装置としての重要性を指摘され、その回復のためには生物多様性に配慮しない単一樹種の植林ではなく、やせ地でも育つマメ科の木などを「捨て植え」し、あとは自然の遷移に任せる「環境造林」はどうかと提案されたりしている。また、先生は日本の里山の雑木林を、東アジアの湿潤気候の文化に特徴的な「飼いならされた森林」の典型的な例と位置づけられ、非破壊でも破壊でもなく、森林を永続的に資源として利用する第三の道として評価され

た。

湖沼の環境問題では、先生は湖沼における酸性化、富栄養化、毒物汚染、水位低下、土砂流入などの問題が集水域に起因することを指摘され、湖沼そのものばかりでなく、集水域を含む系全体に注目された。先生は琵琶湖研究所開設の5年前から文部省の特別科学研究「びわ湖とその集水域の環境動態」に取り組まれ、その代表を務められていた。本会の発足はちょうどその頃（1978年）で、先生は本会の記念すべき会報第1号の最初の記事として「琵琶湖集水域の自然と自然保護」と題する長文の論説を寄せられている。

この論説の中で、先生は琵琶湖の集水域を湖水、湖岸、湖周平野、周辺山地に大別して概観され、近畿地方の中ではよく自然が残っている地域と評価された。とくに、湖岸のヨシ群落やクロマツ林、タブ・スダジイの極相林、湖周平野の川辺林や堤防林、神社林などの平地林、周辺山地の薪炭林やブナ林、ケヤキ林、高層湿原などの植生の価値に触れられ、これらの残存する自然を生かし、自然環境を悪化させない開発により、琵琶湖水資源の質・量両面の保全を目指すことを自然保護の課題としてあげられた。

このような先生の広域地理学的あるいはグローバルな発想や研究アプローチは、中学・高校時代の登山と大学時代以降の今西錦司氏に師事しての未開地探検で培われたとご自身が『森林の環境・森林と環境』（新思索社、2001）の「あとがき」で述べられている。なかでも、今西氏を隊長とするミクロネシア・ボナベ島調査（1941年）や中国・大興安嶺探検（1942年）の印象が強かったのではないと思われる。

本会は2008年に30周年を迎えたが、それを記念して2007年の暮れに吉良先生に特別講演をお願いした。先生の「モンゴルの自然」と題するご講演は、1998年から10年にわたって調査に通われたモ

ンゴリア国の自然と文化に関するもので、気候と植生と人の生活について、先生らしい広い視野からのお話をうかがうことができた。先生がこの調査に関わられたのは、京都大学の生態学研究所と琵琶湖研究所のチームが合同で始めたモンゴリア最北部のフブスグル湖の調査に誘われたのがきっかけだそうであるが、この湖を囲むカラマツ類を主体とする森林景観が大興安嶺と同じだったため、その魅力の虜になってしまったのだという。琵琶湖研究所での大役を果たされた先生が、ご自身の研究者人生の原点ともいえる大興安嶺の森に呼び戻されたということかもしれない。

本年（2011年）11月20日、琵琶湖畔に立つ大津プリンスホテルにおいて「吉良竜夫さんを偲ぶ会」が約300名もの関係者の参加のもとに開催された。まず、元滋賀県知事の武村正義氏が発起人を代表して挨拶され、吉良先生が琵琶湖研究所に就任された際のエピソードを披露された。続いて、同研究所開設当時の所員でもあった現知事の嘉田由紀子氏がお別れの言葉を述べ、世界湖沼環境会議がすでに13回開催され、吉良先生が「湖沼研究の父」と呼ばれていること、先生が日本の北と南の生物要素がぶつかる滋賀の自然を愛していたこと、などを話された。

会場には、細かい字でメモが書き込まれたフィールドノートなども展示され、世界各地で取り組まれた、徹底した観察と数量化を特徴とする先生のフィールドワークの様子を垣間見る思いがした。偲ぶ会は「琵琶湖周航の歌」の最後の部分を「眠れ吉良さん、安らけく」と替えて参加者全員で合唱し、お開きとなった。替え歌は、吉良先生が日本生態学会の会長時代に幹事長を務められた只木良也氏のご提案によるものだった。

先生の著作類を集めた『吉良竜夫著作集』（全5巻）は、現在第3巻が発行されたところであるが、先生は第2巻の出版直後に他界された。この

著作集には、先生が私たちに伝えたかったメッセージが満載されている。もう先生から直接ご教示いただく機会は失われたが、残された多数の著作から、私たちは多くのことを学び続けることができるはずである。

先生は遠いところに行かれたが、きっと「所変

われば自然も変わる」といういつもの旺盛な興味は尽きることなく、天国でも観察やデータ取りを続けられていることと思う。

吉良先生の長きにわたる本会へのご貢献とご指導に感謝しつつ、慎んで先生のご冥福をお祈りしたい。